悪夢の森

saolipooh

にょろにょろ

龍と関係を持ったら、蛇が産まれた
蛇を放っておくと、みみずが増えた
にょろにょろしているのは、嫌いなので、
みみずを、残らず地面に埋めた
そしたら、桜の木が生えて
春になったら、落ちてくる
毛虫が、たくさん、落ちてくる

ぼとっ。　ぼとっ。　ぼとっ。　ぼとっ。
ぼとっ。　ぼとっ。　ぼとっ。　ぼとっ。
ぼとっ。　ぼとっ。　ぼとっ。　ぼとっ。

地獄の門

　自動車の運転免許を持ってはいるものの、いわゆるペーパードライバーの私は、ほとんど車を運転した経験はなかった。だから、トラブルに巻き込まれた家族を迎えに行くのは、本当は気が進まないことだった。久々に車を運転して、慣れないことで、事故でも起こしたら、不幸の連鎖になるだけだ。けれど、家族のことも心配だったので、やはり、勇気を出して、細心の注意を払って、家族を迎えにいく覚悟を決めた。
　近頃は、カーナビというものが、車に装備されているものが多い。道をよく知らなくても、地図が読めなくても、カーナビに目的地を入力すれば、あとは、その機械が、次は右に曲がってくださいとか、なんとか、教えてくれるのである。道は、カーナビがなんとかしてくれるからいいとして、あとは、うろ覚えの交通標識とか、細かい交通上のルールだとかが心配なのだが、そうは言っても、家族は路上で立ち往生しているのだし、家には私一人しかいないのだし、しょうがない。私は、深い深呼吸を一つすると、車のキーを回し、エンジンをかけ、出発した。
　滑り出しは、順調に思えた。確かに、駐車場を出るのは、困難には違いなかった。何より、心細いのは、もう夜の９時過ぎだということだった。外は真っ暗で、月明かりと街灯では、私の不安な気持ちを煽るだけで、ちっとも落ち着くことができなかった。けれど、なんとか駐車場を出て、ひとまず大きな通りに出てしまえば、あとは、スピードを出しすぎず、周りの車に合わせて、前に進めばいいのだ。幸い、まっすぐな道が続いたので、アクセルとブレーキさえ間違わなければよかった。車に乗っていることに慣れてくると、道を曲がるのにも、挑戦することができた。「この調子なら、大丈夫だ」と、私は、だんだんと自信を持ち始めた。
　順調に進んでいくと、カーナビが「１００ｍ先、右折です」と言うので、右折は苦手なのだが、なんとかして右折した。すると、カーナビは、「この先、料金所です」と言う。少し焦った。いつのまにか、有料道路の入り口に入ってしまっていたようだ。しかし、この際、お金を払うこと自体については、問題はない。お金を払う行為、そのものをうまくできるかどうか、それが心配だった。ETCの車載器はあったものの、ETCカードを私は持っていなかったので、私はETCを使うことができなかった。料金所で、うまく車をつけて、料金を払わなければならない。そんな行為をスムーズに自分ができるのかどうか、それは自分が一番怪しく思うところだった。でも、そんなことを考えている間にも、料金所らしきところが見えてきた。いや、その表現は、正しくないかもしれない。実際、私は、今まで、有料道路の料金所に対して、少しも注意を払ったことがなかった。一人で車を運転して料金所でお金を払うことは初めてだったし、家族が運転した車に同乗しているときは、家族がお金を払っていたので、どういう風にして、料金所を通過しているのか、じっくり観察したことがなかったし、記憶も曖昧だった。なんとなく、建物があって、ゲートがあって、ゲートを通る際に、係員との数秒のやり取りがあって・・・という覚えがある。が、鮮明な記憶が浮かばない。私は、だんだん、不安が大きくなるのを感じた。料金所の建物というのは、あんなにも、堂々として立派な、ゴシック調の背の高い、美しい教会のような建物だったろうか。目の前に、天使や魔物のレリーフがたくさん施してある、美しい尖塔を持つ立派な建物と、ヨーロッパのお城の前にあるような、こちらも美しいレリーフで埋め尽くされた門構えが近づいてきた。

料金所は、混んでいた。列が一列しかなかった。頭上に「ETC専用」と流麗なレタリング文字が彫られているETC専用ゲートは、故障しているのか、「使用禁止」という立札が立ててあった。そのためか、もう夜だというのに、トラックや自家用車がたくさん並んでいて、なかなか前に進まないようだった。仕方がないので、列の最後につく。

列は、なかなか進まなかった。私は、車が停まっているうちに、心を落ち着かせて、料金所やゲート、前の車を観察して、自分の番になったらスムーズに事を進められるようにしておこう、と心に決めた。よくよく、料金所を観察してみると、それは本当に立派な建物だった。ヨーロッパ建築に詳しいわけではないが、これは、明らかにキリスト教の影響を受けたものだろうと推測できた。世界史の教科書に載っていた、教会の趣があったのだ。そういえば、何年か前にフランスへ旅行に行ったときに、これと同じような建物をたくさん見たような気がする。パリのノートルダム聖堂に似ているかも、と思うと、なんだか自分が博識になったようで、嬉しくなった。列が少しづつ進み、門が一歩一歩近づくと、料金所と門が、本当に細かく彫刻が施されているのがよくわかる。それはとても美しいし、こういった渋滞のときには、天使の姿や、醜い魔物の姿を観察することができて、とても楽しいが、でも、公共のものにしては、いささか手が込みすぎ、といった印象も受ける。いつか、テレビで大阪のゴミ処理施設が、アーティスティックで奇抜な色と形をしていることを、行政の無駄遣いの象徴として、こっぴどく叩かれていたのを思い出す。私は、見た目に美しいと思ったが、「予算に余裕がないのに、無駄だ」「消費税を上げることになる」などと知識人たちが叫んでいると、それはもっともだ、と思う。この料金所も、お役所仕事の悪の象徴なのだ、きっと、テレビでいつか取り上げられるに違いない、と思った。

ところで、本当に、なかなか列が進まない。私の前は、大型のトラックだったが、運転手が、窓から、ほとんど体を乗り出して、遠くの料金所を眺めて、そわそわしていた。何度も、腕時計を気にしているらしい。トラックの運転手は、時間の勝負なのだろうな、なんて大変そうな仕事なんだ。すると、その運転手が、大きな声で叫びはじめた。

「おーい、早くしてくれよ！もうじき、１２時になっちまうじゃねーかよ！」

その声のあまりにも緊迫した雰囲気に、私は、自分が言われているような気がして、一瞬、体をこわばらせた。運転手は、何度かクラクションさえ鳴らした。すると、そのトラックのもう一つ前のトラックの運転手が、後ろを向いて、「うるせー！しょうがねぇだろ、黙ってろ！」と怒鳴り返した。私の前の運転手は、それを聞いて、さらに苛立ちをつのらせたようで、ついに、トラックから降りて、自分の前のトラックまで走っていき、そこの運転手に食ってかかった。

「なんだと、てめー！１２時になっちまったら、どうなるか、わかってんだろ」

「オレだって、同じことだ。こっちだって、焦ってんだよ！」

「てめぇ、ちょっと外にでろ！」

「外になんかでるか、戻れ！」

見たからに屈強な男二人が、トラックの窓越しに、喧嘩をしている。私は、参ったな、と思っていた。まぁ、列が進めば、トラックも動くのだろうけど、こっちだって、家族が待ってる。決して、のんびりしたいわけじゃない。苛立っている二人を見ると、こっちまで焦りがでてきた。すると、料金所のほうから、白い制服を着た若い女性がやってきた。

　その制服もまた、少し変わっていた。ここが料金所に並ぶ車の列ではなかったら、おそらく、この女性を料金所の係員の人だとは思わなかっただろう。白い絹のような滑らかな素材でできたポンチョになっており、ポンチョの下には、修道女のような黒いワンピースを着ているようだ。ポンチョの下から出した両腕に、書類らしきものを抱えて、小走りにトラックの運転手たちのもとにやってきた。髪はお団子を二つにしてまとめて、なんだか子供のような雰囲気の女性だった。係員の女性は、運転手たちをなだめると、腕に抱えていた書類を読んだり、めくったりしながら、運転手たちにいくつか質問をしたようだった。
「そうだよ」「ああ、荷物を運んでるんだ」「通行許可証」といった言葉が、聞こえてきた。係員の登場に、血の気が多い運転手たちも落ち着きを取り戻したようで、もう怒鳴ったり叫んだりしていなかった。私の前のトラック運転手も、自分のトラックに戻ってきた。係員は、何事か、書類に書き込んだり、おそらく、彼らから受け取った料金を袋に入れたりしていた。すると、私が一部始終を観察していた視線に気づいたのか、彼女は、私の車に近づいてきた。私は、窓を開けた。
　係員は、爽やかな笑顔を振りまいた。もう夜中だというのに、こんなにかわいらしい、若い女性が担当しなければならないなんて、かわいそうに、と思う。しかし、彼女は、そんなことはつゆとも思っていない、というような、全ては幸せで満ちている、とでも言いかねない、優しい笑顔で私を迎えてくれた。「こんばんは」と言う声も、子供のように高くて柔らかく、清々しい。私は、もうこの係員のファンになっていた。
「夜遅くに、ご苦労さまです」
つい、私の口から、こんな言葉が出た。彼女は、嬉しそうに笑い声を立て「ありがとうございます」と言った。
「これから、どちらに行かれるんですか？」
「家族を迎えに、Aまで」
「あら、それなら、この道路を少し行けば、すぐですね」
「そうですか、道がよくわからなくて」
「近所の方ではないのですか？」
「家は近いんですけど、運転は苦手で」
私が苦笑いすると、彼女は、大きくうなづいて、その優しい笑顔で「大丈夫ですよ」と言ってくれた。彼女は、私の言った行先やなんかを書類に書き込んだらしい。
「料金は、３００円です。けれど、申し訳ないのですが、もうじき、１２時になってしまうんです」
彼女は、申し訳なさそうに、少し眉をひそめて、いかにも残念、という思いを声に込めて言った。
「あの、１２時すぎると、どうなるのですか？」
彼女の言い方に、私は少し不安になって聞いた。
「深夜料金が、少しかかってしまうんです」
私は、ああ、このことで運転手たちがもめてたんだな、と合点がいった。同時に、ほとんど泣き出しかねないような彼女の言い方に、私は驚いてしまった。

「いいんです、いいんです。来るのが遅かったんですし、そんな高額じゃないですよね？」
「ええ。もちろん。それから、１２時になると、係員が交代になって、少しお時間をいただく形になりますが、よろしいでしょうか？」
「ああ、それくらいなら、全然いいです。そんなには、急ぎませんから」
私は、係員の彼女の顔が少しでも早く晴れるように、と思って、つい、そんなことを言ってしまった。本当は、家族を迎えに早く行きたいし、追加料金をとられるのもシャクなのだが、そんな文句を言ったところで、規則でどうにもならないのだろうし、彼女を困らせることになるかもしれない、と思うと、とても心苦しい気がしたのだ。
「本当に、申し訳ございません。時間が近づいてまいりましたので、あなたの前のトラックの方までで、締め切らせてもらいます。けれど、すぐに交代の者がまいりますので、その者に、料金を払っていただけますでしょうか」
「わかりました。親切に、ありがとうございます」
私がほほ笑むと、彼女も、にっこりと優しい笑顔を見せてくれて、何度も頭を下げると、さっそうと料金所へと戻っていった。彼女が去ると、列の動きもよくなったようで、前に進んでいった。私は、これまで、料金所の係員なんて、無愛想なものだ、と決めつけていたのを恥ずかしく思った。行政といえども、きちんとサービスを教育されているところはあるものだ。
　すいすいと進む列に乗って、車を動かせていたのだが、一点だけ気になることがあった。私の後ろにも、長く列が続いていたはずなのに、係員との会話の後、私の後ろの人たちが一斉に列から離れたのである。そして、みんな、一般道路へと降りていくのが見えた。私は、少し心配になった。みんな、そんなに深夜料金を払うのが嫌なのだろうか。そんなに高い料金になってしまうのだろうか。そういえば、いくらになるのか、聞いてなかった。でも、そんなに高くないって言ってたし・・・・。しかし、もう遅かった。列はどんどん進み、いよいよ料金所の門は近づいてきた。そして、私の前のトラックの運転手が門を通過した。さきほどの係員の女性の姿が、料金所の窓から見えた。彼女は、私の顔を見ると、にっこりと笑って、口をぱくぱくとさせた。きっと「もう少し、待っていてくださいね」と言ったのだろうと思う。私も笑顔で頷くと、車を少し進めて、料金所の真横につけた。私は、門の真下に来ていた。門の奥には、もう渋滞が解消され、広々とした道路が広がっている。そして、門には、大きな龍のような、こうもりの翼を持ち、鋭い牙のある口を大きく開けた悪魔の彫刻がぶら下がっており、ちょうど運転席の私と目が合った。悪趣味だな、と思う。料金所の窓を見ると、係員の女性は、もう姿が見えなくなっており、料金所には、誰もいないようだった。きっと、この後、交代の人が来るのだろう。私は、エンジンを止めて待つことにした。前にも、後ろにも、車は一台も見えなくなっており、私は、料金所に一人だった。私は、心細くなった。さきほどの門に彫られた悪魔の彫刻が目にとまった。そのむき出しの眼球が、私の視線をとらえる。実に気味が悪い。
　突然、どん、どん、どん、と音がした。と、思ったら、急に、運転席の窓ガラスが、大きな音をたてて割れた。私は、びっくりして声も出せずにいると、胸倉を誰かに掴まれた。私の目の前に、悪魔がいた。
　その目は、血走っていた、まぶたがないのではないか、というくらい、目玉がむき出しになっていて、彫刻の悪魔とそっくりだった。やたらに大きな顔が私に覆いかぶさってるように思った

。赤い唇から、黄色い汚れた歯が見え隠れする。余計な肉はないかわりに、骨ばっている頬や屈強そうな顎は、私のようなひ弱な人間なんて、すぐに食い尽くしてしまいそうだった。黒い制服を着ているのかと思ったが、それは、日焼けで黒々とした裸の上半身であった。金剛力士像のような筋骨隆々の体は、内側からの力ではちきれんばかりに突っ張っていて、彼に掴まれれば、私の骨は、簡単に握りつぶされるに違いなかった。彼の腕には、金の腕輪が揺れており、彼が動くたびに、かちり、かちりと音を鳴らした。そんな彼が、私の車の窓ガラスを破って、そこから、私の胸ぐらをつかんでいた。
「答えろ。お前は、どこに行く」
私は、突然のことに何もわからなくなってしまって、一種のパニック状態に陥っていた。声を出そうにも、強く体を引っ張られているので、息さえできない。悪魔は、運転席側のドアを引きちぎって外へ放り投げた。シートベルトも引き裂いて、私は、地面に叩きつけられた。
「言え。お前は、どこに行く」
「か、家族を、迎えに、Aまで・・・・」
「キコエヌ」
悪魔は、一度地面に放った私の腕を引き上げた。その拍子に、私の腕は、私の体から取れてしまった。私は、ひどい激痛とともに、また地面に叩きつけられた。同じことをもう片方の腕でもやって、なお、ひたすら、悪魔は「言え」「聞こえぬ」「答えろ」と言っていた。私は息も絶え絶えに、声を出そうとするが、ついに頭をはぎ取られ、血まみれになってこと切れた。
　朝になった。
「また、やってしまったのね」
交代に、女性の係員がやってきた。二つのお団子頭の彼女だ。彼女は、バラバラになって地面に転がる私の体を見下ろしていた。
「あなたは、真面目すぎるのよ」
にっこり笑って、係員に言った。

悪癖

　誰にでも、昔からの習慣のなかで、あまり品の良いとは言えないような悪癖を持っているものである。「無くて七癖」とも言う。でも、他人の悪癖ほど、気になる、あるいは気に障るものはない。自分の癖は「癖だからしょうがない」と思っても、他人の癖は「なんで、こんなことをするのだろう、おかしいんじゃないか」と思う。それは、どうしようもないことだ。
　告白すると、私は、カレシの癖が、とんでもなく嫌いである。彼のことは、大好きだし、趣味も合うし、考え方も好きである。仲良がいいし、うまくいっていると自負しているし、彼もそう思っているだろう。でも、どうしても、あの癖だけは、許せないのである。その癖とは、彼が自分の指をことあるごとにくわえることである。恐らく、何か考え事をしているときとか、心配事があるときの無意識に出る癖なのだろう。悪気がないこともちろん分かるし、きっと、自分が口元に指を置いていることさえも気づいていないことが多いのだろうと思う。しかし、頭では分かっていても、どうしても、胸が悪くなってくるのである。
　二人で、一緒にソファに座って、テレビを見ている。すると、ふいに彼の腕が動く。私は、恐ろしく敏感にその動作に反応してしまう。恐る恐る彼のほうを横目でみると、もう彼は、自分の親指を口元に持っていっている。私は、ぞくぞくと背中に寒気がするのをこらえて、彼から目線をそらす。しかし、見えていなくても、私は、見ているのだ。
　　ぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼり
隣から、音が聞こえてくる。私は、耐え切れずに、また彼を見てしまう。やっぱり、またやっていた。
　　ぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼり
彼は、親指をかじり、爪を引きちぎって飲み込んだ。爪の跡から流れる血をチューチュー吸う。血が流れなくなると、親指の第一関節のところまで口でくわえて、また引きちぎる。骨が砕かれる音がして、また指から血が溢れる。それを彼は、残さず吸い尽くす。噛みきれず、肉の間から垣間見える白い骨をしゃぶる。そんなことが長時間続く。いや、実際にはそんなに長い時間ではないのかもしれないが、私にはとても長い時間のように思える。心が狭い女だと思われたくないので、ここまで、何も言わずに我慢していたが、やはり、この辺りになると、我慢も限界を超えてくる。私は、最大限の忍耐を発揮するが、その忍耐は、ついに尽きてしまった。
「ねぇ、また、指・・・」
私が言うと、彼は自分の行為に気づき、一応は、動きを止める。そして、めんどくさそうに溜息をつく。
「ああ、癖なんだよ」
「やめたほうがいいよ？せっかく、親指やっと生えてきたのに、またしばらく不便だよ」
「大丈夫だよ」
彼は、そう言うと、不機嫌そうに顔をしかめた。そして、しばらくは、そうしておとなしくテレビを見ているのだが、また、ものの何分かすれば、いつのまにかまた、さっきと同じ行動を繰り返していた。
　　ぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼり

彼のことは、大好きだ。別れることなんて、まったく、考えられない。けれど、いつまで、この音を聞いていなければならないのだろうか。結婚なんてしてしまったら、もう一生、この音から逃げられないのだろうか。ときどき、そんな風に考えて、憂鬱でたまらなくなる。

夢のたまご

「それさえあれば、生きていける」と
テレビでも映画でも
歌でも小説や漫画でも
その宣伝力はすごかった
だから　私も夢が孵化するというたまごを買った
１００万円の白いたまご
丸くて　つるつるで　大きくて（高さが２ｍある）
傷ひとつついていない　新品のたまご
けれど　家に置いただけでは　ダメだ
夢のたまごは　手がかかる
大きな設備を用意して　常に温めないといけない
熱すぎても　冷たすぎても　いけない
湿度も重要だ
私は　そいつの世話に　かかりきりになった
だから　会社を辞めて
友人や家族との付き合いもなしにして
夢のたまごが孵化する日を　心待ちにしていた
お金も　手間もたくさん　かけた
だけど　まだまだ　孵化しない
とうとう貯金も底を突き
設備や機械も動かせなくなった
だけど　私は大事に抱えて
毎日　毎日　胸に抱きしめていた
それなのに
たまごは　とうとう腐ってしまい
最近じゃあ　夢の悪臭が　私を悩ませる

浴室の雪

　ある美しい三兄妹が、罪を犯して、その母によって浴室に閉じ込められた。それぞれの手に手錠をはめられ、年の順に並んでつながれ、一番上の長男の手錠の一つは、浴室の水道の蛇口につながれた。その家に、一人のホームレスが忍び込んだ。昔、働いていた工事現場で使っていたツナギの制服一着しか持っておらず、その一着を傷と汚れだらけでボロボロにさせていた。まだ２０代後半なのに、職を失い、家もなく、その日暮らしをしていた。あまりにも寒い日だったので、空き家だと思ったその家に忍び込んだのである。そして、美しい三兄妹を見つけた。
　長男は、１０歳前後であろう。黒髪で、恐ろしく白い肌に、アーモンド形の目のなかは、ほとんど黒目で占められていて、悲しんでいるのか、怯えているのかさえ、表情を読み取ることができなかった。妹二人のうち、長女は、長男と次女に挟まれていた。長女も黒髪で胸ほどまで伸ばし、ほとんど青いほどの透き通った肌をしていたが、瞳は兄と違って青く、６歳になるかどうかといった歳だろうが、その体に肉はほとんどついていなかった。その細い両腕にはめた手錠が、痛々しく兄妹につながれていた。末っ子の次女だけが、片方の腕が自由であったが、狭い浴室の中では、何の役にも立たなかった。末っ子は、まだ３歳ぐらいの小さな女の子で、兄や姉とは雰囲気を違えた。おそらく、金髪でパーマをかけたようなくりくりとしたショートヘアや、まるまるとした体型が、その印象を与えるようだが、陶器のように白い肌が兄妹の証となって光っている。若いホームレスの男は、物音がする浴室のドアを開けて、この三人の兄妹を発見したときには、大きな人形が三体、置いてあったかのように錯覚した。しかし、彼らは瞬きをし、息をするため、肩をかすかに上下させていた。三人とも、ホームレスが浴室の扉を開けて姿を見せたことに、少なからず驚いたようで、合計６つの瞼を大きく見開いて、ホームレスを見ていたが、しかし、言葉は一つも発しなかった。
　その出来事が、兄妹たちの母の怒りをかった。彼らの母は、神だったので、誰にも姿を見せることなく、彼女の意のままに万物を動かすことができた。
　突然、浴室の天井が剥がれて見えなくなった。外は、それが夜であるならば、夜にしては明るかった。もしも、昼であったならば、昼にしては暗かった。雪が降っていたからだ。灰色の雲が厚く空を覆い、空は紫色にかすんでいた。外の明かりを吸収し、薄暗くさせた。白い雪が風に乗って、ちらちらと舞った。すると、風が強く吹き、ホームレスの男の体を浴室に押しやった。浴室でバランスを崩し、倒そうになった彼の体を、三人の兄妹は手錠でつながれている両腕で支え、そして、彼の体を空の浴槽の中へと沈めた。灰色の雲から、雪が次々と降り注ぐ。ホームレスの男は、もはや意識を失っていた。腕と足を折って、縮こまって浴槽に埋まる彼の体に雪が降る。はじめは、彼の服や体に触れると溶けていった雪が、塊となって、彼の体に降り積もっていった。三兄妹たちは、ホームレスを見つけたのと同じ目で、その空を見上げている。昼にしては暗く、夜にしては明るい空が、静かに彼らの浴室を覆っていた。

　ある日、とある一軒家から４体の遺体が発見された。３つは子供のもので、１つは成年男性のものだった。浴室いっぱいに、なぜか雪が隙間なく詰まっており、雪をかきだしてみると、そのなかに４体の遺体があったのである。警察は、この件は事故ではなく他殺であろうと疑いを持ったが、いったい、なぜ、どうやって、なんのために犯人が、このような犯罪にいたったのか、推測を立てることさえ困難だった。そのため、この件は、迷宮入りとなった。

僕の救った世界

　僕は、あるとき、ひょんなことから異世界へ迷い込み、その世界を救ったことがある。最初は、驚くことばかりで、戸惑い、あの世界のルールも分からず、混乱し、困難が多かった。けれども、あの世界で出会った友人たちと多くの敵とが僕を成長させてくれた。そして、世界の危機に際して、僕は手腕を振るい、世界を救うことができた。
　その後、僕は自分の世界に帰ってくることができた。異世界では、何年も過ごしたはずなのに、現実の世界では、ほとんど時間が経っていなかった。そして、僕は、ときどき、現世界と異世界とを行き来するようになった。異世界への入り口は、僕の家の2階のトイレの窓である。とても小さくて、体を縮めてギリギリ通ることができるだけの大きさしかない。そうやって苦労して、僕は異世界へ行く。何ヶ月か過ごしても、トイレが長引いたほどの時間しか現世界では経っていないので、親に心配をかけることもない。そうして、僕は、あっちの世界とこっちの世界との生活をしていた。
　しかし、どうにも、こっちの世界は、生きにくい。異世界の住人は、姿かたちこそ、異形のものが多いけれど、気は良い人ばかりである。もちろん、異世界でも悪にとらわれ、人々を支配し、混乱に陥れようとする輩は、たくさんいる。そいつらは、火を噴いたり、毒針で刺そうとしたり、巨大な力で押しつぶそうとしてこようとしたりする。しかし、勇気と知恵とを持ってすれば、彼らを改心させることができるのだ。事実、僕はそうしてきた。けれど、現世界では違う。どんなに頑張っても報われないことばかりだ。悪に手を突っ込んだ犯罪者に対して、勇気を持って対峙するどころか、まるで無関心である。そして、悪や不徳に対して、立ち向かおうとすれば、民衆が逆にそうした善や美徳を全力で押さえつけようとする。そうして、みんな全て平らに均されてしまうのだ。努力が報われず、善が卑しめられ、美が排除されるこの世界に、どんな魅力があるというのだろう。想像してみてほしい。心が晴れ晴れとするクリスタルが溶けた澄んだ湖、妖精が遊び一口で腹一杯の実がなる木がたくさんある森。お化けがいる洞窟。そんなものが全くない世界にどんな意味がるというのだろう。思い巡らせてみてほしい。ユニコーンが飛ぶ夜空に流れる星、ドラゴンが啼く宮殿に咲く七色の花。そういったものが何もない世界がどんな価値があるといのだろう。
　僕は、だんだん、この世界で生きることに意味を見つけられなくなってしまった。僕の救った世界なら、僕は英雄だし、英雄的な行為をし続けることができる。善と美を体現できるのだ。僕の力が発揮できるのは、異世界だと思っていたあの世界なのだ。僕のなかで、異世界こそ、本当に僕の生きる世界だという認識が強くなっていった。そのため、だんだん、異世界にいることが多くなっていった。
　すると、さすがに母親が心配をするようになってきた。僕は、母も異世界に連れていって、一緒にあっちで過ごしたかった。けれど、母の大きさでは、トイレの窓ではお腹がつかえて、とても通ることができないだろう。窓を大きくすれば、どうだろうか。僕は、母にそのことを相談した。素直に異世界の話をして、一緒についてきて欲しい、とお願いした。しかし、母は僕の言うことを信じなかった。すぐに病院へ連れていかされ、僕は、即入院となった。
　入院生活は、そんなに悪いものではなかった。現世界のいろいろなことから断絶され、もう一つの異世界のようにも思えた。けれど、僕は僕の救った世界がいとしく、長く離れることが耐えられなかった。どうしても、またあの世界へ戻りたかった。そして、週に一回ある医者との面接に、なんとか正常であるということを分からせるために、異世界のことを否定し、そんなことを信じた自分を馬鹿のように思う、きっと疲れていたのだろう、と告げた。やっと半年経って、退院することができた。
　僕は、家に戻ると、急いで２階へ駆け上がり、窓を開けた。小さな窓から、小さな青空がきらきらと光っていた。僕は、いつものように足から窓に身を乗り出した。困ったことに、久しぶりにこの窓の外に出ようとしているため、感じを忘れていて、なかなか体がすり抜けなかった。何度も体制を変え、体をねじって、窓に体を通そうと躍起になった。それがいけなかったのだろうか。体がすり抜けた瞬間、僕は、2階のトイレの窓から、ころりと落ちた。

僕の掬った世界

白い雲が覆っている
まぁるい　まぁるい　僕の地球
あぁおい　あぁおい　僕の地球

ビニールプールに　たくさん　浮かんでいる星
ゆっくりと　慎重に　針を雲に引っ掛けて

すくい上げた　僕の地球

悪夢の森

　悪夢の全てを箱に詰め、トランクに入れて、持ち出した。遠い遠いところへ持っていって、もう二度と目にすることができないように、捨ててしまおうと思ったのだ。車に乗って、高速道路で家より遠くへと駆けていった。
　人工の道を通り抜けて、山も湖も海も越えて、遠くへ遠くへ駆けていく。悪夢の詰まった箱の入ったトランクは、まだ不穏な空気を湛えている。私は、いち早くこの箱を捨ててしまいたかった。けれども、焦って近くで捨てるのも怖かった。とにかく、この悪夢にもう二度と出会わないようにしたいのだ。何日もかけて遠くへ行った。私は、異国へ迷い込んでしまったようだ。知らない土地、見たこともない風景が広がっていた。青白い山が空に広がる。紫の雨が降り、赤い湖に街が浮かび、緑色のアスファルトに黄色のレンガの車が走る。黄色の車に紛れて私は、さらに自分の車を走らせた。しかし、紫の雨は、私の車を少しづつ溶かし、私は、車を捨てなければならなくなった。すっかり車の外形が整わなくなったところで、雨はやんで、空はオーロラのように、七色の光をはなって揺れた。私は、トランクひとつ持って、途方に暮れた。七色に揺れる空に酔ったようで、気持ちが落ち着かず、頭がくらくらした。私は、トランクを持って、緑のアスファルトを歩いていった。
　何時間経ったかわからない。私は、ひたすら歩いていた。どこへ向かっているのかもわからなかった。
　アスファルトの先に、赤い森が燃えていた。私は、そこへ吸いつけられるように向かっていった。森のなかに、鉛でできた工場があった。私は、工場のなかに入っていった。工場のなかは、大きな機械がたくさん置いてあって、大きな音を鳴らして動いていた。私がなかへ入ると、係員が近づいてきた。私は、見学をお願いした。機械のベルトコンベアーには、たくさんの白くて大きな卵が乗っており、一定の間隔で動いていた。
　　ずいぶん、大きな卵ですねぇ
私は、耳のない係員に聞いた。
　　こんなに大きくなるには、きっと大変な時間がかかるんでしょうね
係員は、眼球のない目で私をにらんだ。彼は、指をさした。その先には、さきほど見た２ｍほどの卵とは違う、もっと小さな手のひらサイズのベージュの卵がベルトコンベアーに乗っていた。そして、小さな卵がベルトコンベアーに乗りながら大きな箱に入っていくと、箱から出てきたときには、さきほどの大きな白い卵となって流れていた。私が驚いていると
　　一瞬だよ
と、舌のない係員が言った。私は、工場を出た。
　また、ずいぶん長く緑のアスファルトを歩いた。まだ悪夢の詰まった箱を捨てるべき場所が見つからなかったのだ。私は、疲れ果てていた。頭痛はとれないし、眩暈もした。途方に暮れて歩いていると、茶色いチョコレートで出来たお城が見えてきた。私は、お城の中に入った。なかには、コーヒーショップの店員がいた。私がカウンターに座ってコーヒーを頼むと、店員は玉虫色のコーヒーを持ってきた。私は、ほとんど一気に飲み干すようにした。私が非常に弱っているのを見て、店員は私に一晩泊まるように提案してくれた。私は、２階の宿に泊まることにした。
　朝、起きると、窓の外は真っ白だった。何も見えないほど白く、緑のアスファルトもまるで見えなかった。私は、トランクを持ってお城を出た。お城を出る直前、コーヒーショップの店員は、お似合いの素敵な帽子ですね、と言った。
　白い風景のなかをひたすら歩いた。白いなかを歩いていくのは、苦痛であった。何も見えず、どこを歩いているのか検討もつかなかった。もしかしたら、同じところをぐるぐる回っているかもしれないと思った。けれど、だからといって、道を変えることもできなかった。ただあてどなく歩いた。どこかに着くという保証はなく、自信もなかった。ただ歩くことしかできなかった。すると、白い風景のなかに、一筋の闇が見えた。私は、吸い寄せられるようにして闇のほうへ向かっていった。闇は小さく遠く、その正体になかなか近づくことができなかった。けれど、少しづつ歩みを進めるうちに、闇は大きくなり、ついに私は、闇のなかに包まれた。すると、さきほどまで白一色だった風景の欠片も手元に残らず、私は、完全なる闇に包まれた。しかし、白いなかよりも、この真っ暗な闇のほうが、人の精神を静め、慰めるようだった。私は、安堵の思いで、その場に座りこんだ。そして、ここでなら大丈夫、と思った。私はトランクを開け、いつまでも持っていた悪夢の箱を取り出した。もちろん、真っ暗闇のなかだったので、すべて手探りだった。そして、箱を思いっきり勢いをつけて投げた。
　私は本当に心の底から安心したのだろう。そこで、眠ってしまった。闇のなかにいると怠惰な気持ちが増幅されるのかもしれない。私は、やっと悪夢を手放した安堵感と溜まった疲労とで、しばらく意識を失っていた。目が覚めてか

らも、私はしばらく動くことすらできなかった。闇のなかにいるので、目を開けても閉じていても、見えるものは同じだった。それならば、目を閉じていればいいと思った。そうして、ほとんど身動きもせずに長いことその場でうずくまっていた。とても長い時間だったから、何日か経ったかもしれなかった。あるとき、私が寝返りを打つと、腕に金属が当たる感触がした。久しぶりの新しい感触に出会ったため、私は、自然に嬉しい気持ちになった。そして、手探りでその正体を探ると、どうやらドアの丸いノブのようだった。金属のひんやりとした感触が新鮮で、私はそのノブをなでた。そして、何の気なしにノブを回すと、ドアが開いた。私は反動のように開いたドアから外に出た。

　そこは、私の家の近所のコンビニのトイレだった。白い便器のあるトイレの壁には「いつも清けつに、ご理用ありがとうございます」と書いてあった。この文句のために、ここのトイレを覚えているのだった。私は、トイレから出た。そして、コンビニからも出て、家に帰った。

　家に帰って、いつもの日常がまた始まった。一つ違うことは、もう悪夢が近くにないことである。しかし、私の不安感は消えなかった。近くにあっても、遠くにあっても、悪夢を感じるのであれば、いっそのこと、近くにおいてどこにあるのか把握しておけば良かった、と後悔した。あのコンビニのトイレに行ったが、例の場所に戻ることはできなかった。車をなくしたので、また同じ道を行くこともできなかった。私は、まだ悪夢に悩まされている。今度の悪夢は、厄介だ。悪夢が街を呑みこみ、私の家に覆いかぶさり、生い茂る。

膨張している

命は　消耗するものではない
膨張している
命のカケラを吐き　撒き散らし　痕跡を残している
意識を失い　肉体が塵と化すと
命のカケラは　拡散し　「わたし」が　世界を包む
膨張している